

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	篠崎 美生子
論文題目	芥川龍之介論—日本近代文学と〈疎外〉—
<p>審査要旨</p> <p>これまで一貫して芥川龍之介の文学を研究してきた論文提出者が、芥川龍之介の小説とその流通の状況をモデルに、日本近代文学がさまざまな位相で〈疎外〉の暴力に荷担してきてしまったことを明らかにしたものである。従来多く見られたように、初期から晩年まで代表作を作品論の積み重ねの形でまとめたのとは違い、鋭い問題設定で芥川を論ずることの根源的な意味を明らかにするスタイルを取っている。その根源の概念は、近代文学が描く人物の「内面」は、あくまで醜く弱いものとしてイメージされてきたという点である。芥川の小説の多くが、社会的地位、経済力、学歴等の面において特権的な立場にある人物の「内面」を語るものであることも、その反映とする。「序章 「弱い内面の発見」と「鼻」」は、初期の代表作「鼻」の分析で、この基本的構図を鮮明にする。その後に検証される「物語」は、小説テキストだけではなく、メディアに流通した作家のイメージ等も含んでいる。そこに本論文の特色がある。</p> <p>「第一部 「物語」と〈疎外〉」は全三章からなる。「第一章 「物語」化がもたらす〈疎外〉」は、ジェンダーの側面から、「物語」の暴力性を検証する。「南京の基督」においては、基督によって楊梅瘡を癒やされたという宋金花の「物語」が、聴き手の「日本人旅行家」と語り手によって無害で無力なものに造り替えられてしまったとし、一九二〇年代当時の植民地支配的な暴力の発動と平行である点を指摘する。また、「奉教人の死」の語りは、教会の権威やキリスト教的価値を転倒させる目的のために「ろおれんぞ」の「内面」を奪い取って都合よく意味づけた語りに過ぎないと喝破する。「第二章 「物語」化へのノイズ」では、「六の宮の姫君」「蜃気楼」を通じて、テキストが積極的に「物語」を解体し、脱構築を誘う事例を示す結果になっている。「第三章 二項対立の「物語」」では、「羅生門」「蜘蛛の糸」「藪の中」を取り上げるが、「羅生門」論では、圧倒的な情報量を誇示する術学的な語り手が問題視される。テキストから、京都の秩序そのものが内包する排除の暴力性を見いだすことなど、従来の作品論を越えようとする努力が見られよう。「蜘蛛の糸」もまた、「極楽(善)」「地獄(悪)」の明快な二項対立の枠組みに沿った小説であるが、その枠組みが「善/悪」の構図の相対化にどう関係するかが明らかにされる。「藪の中」では、読者が「真相」語りの形で暴力の再生産に荷担してきた実体が分析されて興味深い。</p> <p>「第二部 「物語」とメディア」は、全三章からなる。個別の小説における「物語」ではなく、メディアの中に流通した固有名詞にまつわる「物語」が問題にされ、特に「芥川」という記号がどのように形成され、変遷したかを分析する。「第四章 借景するテキスト」では、まず「枯野抄」が取り上げられる。「芭蕉」の「物語」のひとつであるが、弟子たちのエゴイズムを消費しながら肥え太るようなしかけとするとところなど鋭い。中でも、「枯野抄」以外にも八作の芥川作品に出て来る「内藤丈草」の語られ方の分析は、これまでなされて来なただけに貴重である。続いて言及される「開化の殺人」も、開化の時代と人間の関わり方の分析が見られる。「第五章 「芥川」をつくったメディア」では、活字の上に現前した「芥川」像をとりあげ、作家とメディアと読者の欲望が錯綜する中で、それが生成された過程と戦略が論じられる。まず、芥川が「芸術」家として特権的に表象されるようになった理由を考察し、大量の作家情報を提供する文芸誌『新潮』を検討することで、「telling」の文体を用いて「私小説」を成り立たせる戦略を跡づける。亡くなった「漱石」の弟子としてのブランドを前面に押し出し、一九</p>	

一六～一七年に、文壇アイドルとして一気に露出度を上げた作家として芥川を意味付ける。また、『大阪毎日新聞』の「戦略」では、社友、社員として芥川が深い関係を持った『大阪毎日新聞』が「芥川」に何を期待したかを分析する。「第六章 「上海游記」をめぐる時間と空間」では、従来、芥川の中国体験を如実に語った紀行文としてとらえられてきたこのテキストを、「上海」をめぐる近代日本の言説の中に置き直すことで、「上海游記」が当時果たした役割を問い直したものである。「上海游記」は上海滞在によってパラダイム転換を迫られる「私」の物語（私小説）として読むことができるとする指摘は、注目に値する。論者の観察眼が光った仕事であろう。

「第三部 〈疎外〉に抗して」は、全二章からなる。この論文の問題意識が、その後の文学にどう関連するかが論じられたものである。そこでは、「研究」という場が改めて検討される。つくられた作家像に感情移入する思考習慣が〈疎外〉を引き起こすことを、「第七章 研究の中の〈疎外〉」で、「芥川研究」に即し、また「私小説」と文学史の問題に即して論じられる。「第八章 行き止まりの装置」では、「杜子春」、笹野頼子「母の発達」、更には〈原爆文学〉、アダルト・チルドレン小説までが視野に入れられ、日本近代文学の「物語」と〈疎外〉の関係が論じられることになる。その問題設定は、「終章 「物語」のさらなる破壊へ」につながり、芥川研究の今日的意味を再考することにも関係するのである。

芥川作品を一つずつ年代順に論じていくというスタイルを取らなかった点、やや論理性が先行したきらいがあるが、文献調査は確かで、先行研究への目配りもしっかりしている。ただし、「戦略」「暴力」「排除」といった用語も目立ち、その点で論の膨らみをもう一つ作っていないのが気になる。「鼻」の分析など鋭いが、夏目漱石との関わりで論じるのも必要だったのではないか。ワイニンゲルのみ取り上げるのも、バランスを考えて再考するとよいだろう。論文の題名が、「芥川龍之介論」なので、書き方や論じる角度など、もう一工夫がほしかった点もある。しかし、するどい問題設定は、日本近代文学をどう読むのかという深い問題に連なっており、その点をこのように鮮明に明らかにし、現代の研究の現状に切り込もうとする意欲は高く評価される。作品の跡付けも興味深く、学界に多大の刺激を与えている。よって、本論文を、「博士（文学）」の学位を授与するにふさわしいものであることを認定する。

公開審査会開催日	2016年 1月 29日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	中島 国彦	日本近代文学	博士(文学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	高橋 敏夫	日本近代文学	
審査委員	早稲田大学政治経済学術院・教授	宗像 和重	日本近代文学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	十重田 裕一	日本近代文学	博士(文学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	鳥羽 耕史	日本近代文学	博士(文学)
審査委員	駒澤大学・名誉教授	石割 透	日本近代文学	